第６学年　総合的な学習の時間　実践報告

奈良市立朱雀小学校
教諭　中村友弥

１　単元名　平和学習　−大切にしよう！それぞれの平和を−

２　単元の目標

〇戦争や原爆について調べたり語り部さんの話を聞いたりして、戦時中の人々の生活や様子を知り現在まで戦争の影響が続いていることを理解できる。（知識及び技能）

〇様々な人の平和への考えを共有し、自分にとっての平和を表現する。（思考力・判断力・表現力等）

〇意欲的に学習に取り組むとともに、課題解決や協同的な活動を通して、想像力豊かな社会参加の態度を育むことができる。（主体的に学習に取り組む態度）

３　単元について

（１）教材について

本教材は、主に４つの内容で構成されている。導入は、平和を考える切り口として、広島の平和記念式典や核兵器禁止条約についての新聞記事である。原爆や終戦について書かれている記事を読み、学習課題を見つけることができる。この記事には、原爆や空襲についても記載されているので、語り部さんの話につながっていく。次に被爆者や空襲を体験された語り部さんの話を聞く。実際に体験された方の話から戦争の恐ろしさを想像し、平和の大切さや命について考えるができるだろう。さらに、ロイロノートのシンキングツールを活用した活動を行う。「〇〇だったら平和。〇〇だったら戦争。」というような『戦争と平和の境界線』を考える。この活動では、多様な児童の考えや意見を促したい。語り部さんから聞いて想像した戦争の恐ろしさだけでなく、平和をおびやかすものが戦争以外にもあることに気づいてほしい。最後は、平和集会を行う。学んだことや考えたことを校内で発表する。発表後は、アンケートを取り、平和集会や単元の振り返りに活用することができる。戦争や原爆というマクロのテーマから、身近な平和というミクロのテーマに迫ることで、他人事から『自分ゴト』へつなげていくことができる。戦争を経験していない私たちが、戦争以外のことでも平和がおびやかされることに気づくことができれば、平和の大切さを伝えようとしている人たちの想いに共感できるだろう。新聞記事についてもより理解しやすくなる。

（２）児童について

本学級では、これまでに人権学習や動物を通して考える命の学習を行ってきたが、戦争や原爆を題材にした学習は初めてである。社会科での歴史で戦争や原爆のことはまだ学習していない。２０２１年１月２２日に国連で核兵器禁止条約が発効されたが、日本がこの条約を締結していない新聞記事用いて、児童に問いかけると「核兵器禁止条約？」「もともと禁止されてんのちゃうの？」「あまり意味が分か

らない。」などの返答であった。内容が分からなかったり他人事のように考えたりしている児童が多く「戦争はしてはいけない。」とほぼ全ての児童が答えるが、昨年は平和集会がなかったことを考慮しても、戦争のおそろしさや平和について真剣に考えている児童は少ないように感じた。それだけ、平和というテーマが身近に感じにくいのだろう。人が人を撃つゲームの内容を教室で何の違和感もなく話す児童（ゲームと現実の区別はついていると思うが…）もいる。本単元を通して、戦争や平和について真剣に向き合い自分の意見をもってほしい。また意見を交流し、さらに考えを深めてほしい。

（３）指導について

本単元を実践するにあたり大切にしていることは、『自分ゴト』である。『自分ゴト』ができれば、自ずと価値観の変容や行動化につながると考える。児童の心に平和の砦を築くためにも、『自分ゴト』ができるような指導を心がけていく。

導入として、８月前半の新聞記事を取り上げる。広島・長崎の原爆、平和記念式典、終戦などの戦争や平和についての内容から児童が分からないものを中心に取り上げ、知識を獲得させる。その時には原爆と空襲については必ず取り上げさせ、学習課題を設定していく。

次に、実際に広島で被爆された語り部の秋山さん。奈良で焼夷弾を落とされ被害に遭われた大木さん。２人の語り部さんから当時の様子やその後の様子についてお話をいただく。秋山さんは、被ばくされた当時５歳で、記憶していることを５歳の子どもの視点で語る。語っていただく内容は、本にもなっている。大木さんは、小学生の時に太平洋戦争が始まり終戦の時は高学年であった。昨日まで遊んでいた近所の幼い女の子が焼夷弾によって命を落とす話は、本当に悲しく辛い。２人が当時、見た色、聞いた音、嗅いだ臭い、激痛や突き刺すような暑さは、当事者の言葉でしか語れない。２人の話は、授業者がカードでまとめておき、いつでも振り返られるようにしておく。当時の生活や様子を理解するだけでなく、戦争の恐ろしさや戦後も被ばくの影響が続くことに焦点を当てさせ、戦争は絶対に起こしてはいけないことを強く思わせたい。

児童が戦争や原爆について、語り部さんの話から想像した後に、戦争と平和の境界線を考える活動を行う。「〇〇だったら戦争。〇〇だったら平和。戦争と平和の境界線を考えよう。」と問い、ロイロノートのシンキングツールを活用しながら、自分が思う意見を表現させていく。その過程で、「戦争だけが平和をおびやかすものではない。」ということや「大切にしたい平和はそれぞれ違う。」ことに気づかせたい。これまでマクロであった戦争や平和についてだけでなく、違う考え方、身近な出来事に目を向け、ミクロの視点でも考えさせたい。

最後に平和集会を行う。自分たちがこれまでに学んだこと、考えたことを発信させる。全員が発表できるように、学んできたことを絵本形式でまとめる。全体像を把握させるために、学習の振り返りや絵本の構成を事前に全員で確認しておく。また、平和集会後にはアンケートを取り、平和について、他学年がどのように思っているかを理解し、振り返りに活用する。振り返りでは、学習内容だけでなく、学習後の感想や大切にしたいそれぞれの平和について、意見交流をする。このような活動を通して、「The world needs pease」平和の砦を心に築かせていきたい。

（４）ESDとの関連

・本学習で働かせるESDの視点（見方・考え方）

多様性　…　平和をおびやかすものは、戦争や原爆だけではないということ。
大切にしたい平和は、人それぞれだということ。

連携性　…　誰かを排除する考えは、平和に結びつかないということ

責任性　…　戦争は「起こらなければいいな。」ではなく「絶対に起こさない。」ということ。
平和は待つものではなく、自分たちがつくっていくものということ。

・本学習を通して育てたいESDの資質・能力

クリティカルシンキング

平和をおびやかすものは、戦争だけではないということに気づく。各自が思い描く平和な社会のイメージは人それぞれであることに気づく

コミュニケーション力

それぞれが大切にしている平和を交流し、尊重する。

他者と協力する態度

自分にとっての平和が、必ずしも他者の平和と共通しているとは限らないので、他者の意見を聞いたり相手の立場を考えたりして行動する。

・本学習で変容を促すESDの価値観

【人権・文化を尊重する】

命はかけがえのないものであり、戦争や原爆で奪われてはならないことや被爆者というだけで嫌がらせを受けるような差別はあってはならないことを真剣に考える。

【幸福感に敏感になる。幸福感を大切にする】

それぞれが大切にしたい守りたい平和は、それぞれが大切にしている幸福感につながっていることを実感する。

・達成が期待されるSDGs

【目標１６：平和と公正を全ての人に】

児童の心に平和の砦を築くこと。

４　評価規準

ア　知識・技能	イ　思考力・判断力・表現力等	ウ　主体的に学習に取り組む態度
①戦争や原爆について調べたり語り部さんの話を聞いたりして戦時中の人々の生活や様子を知り、現在まで戦争の影響が続いていることを理解できる。	①戦争と平和の境界線を考え、平和をおびやかすものや自分にとっての平和をロイロノートのシンキングツールで表現することができる。	①平和をおびやかすものが戦争以外にもあることに気づき、自分の意見を伝えようとしている。

②聞いたことや調べたこと、知識を言葉や図、絵などを用いてそれらを関係づけながらまとめる技能を身に付けている。	②聞いたことや調べたこと、考えたことをもとに、戦時中の生活や様子、現在まで戦争の影響が続いていることなどを資料にまとめ、平和集会で発表することができる。	②それぞれの平和のカタチを尊重したいという意識を持ち、平和集会で意欲的に発信しようとしている。

５　単元の展開（全１６時間）

	主な学習活動	指導上の留意点	評価
第一次	①８月前半の新聞記事を読み、学習課題をつくる。 ②分からない言葉や内容を調べる。	学習問題　原爆って何？ ・情報の真偽、事実と意見などメディアリテラシーを意識させるため、出典を明らかにさせる。	ア① （知・技）
第二次	③広島で被爆された秋山さんの話を聞く。 ④奈良で焼夷弾の被害に遭われた大木さんの話を聞く。	・秋山さんが書かれた本を用意し、聞き取りそこねたところは、後から読むことができるようにしておく。 ・秋山さんの話で印象的な言葉 ○「ピカドン」でなく「ピカ」にやられた。 ○「水を飲ませるな。でも、お母さんは水を飲ませた。」 ○「この原爆の生き残りが。」 ・大木さんの話で印象的な話 ○「幼馴染の○○ちゃんが亡くなった。」 ・質問できなかったことは、感想用紙に記入し、後日返答をいただく。	ア① （知・技）
第三次	⑤「戦争と平和の境界線」について考える。 ○○だったら戦争。○○だったら平和。戦争と平和の境界線を考えよう。	・ロイロノートのシンキングツールを活用して、視覚的に戦争と平和の境界線を考えやすいようにする。児童の意見は、共有する。 ・戦争に注目させ、平和をおびやかすものは、戦争だけではないことに気づかせる。 ・平和に注目させ、平和には人によってそれぞれのカタチがあることに気づかせる。	イ① （思判表） ウ① （主体的）

第四次	⑥平和集会を行う。 ⑦単元を振り返る。	・全員に役割を持たせつつ、全体像を把握させるために、発表の流れの確認と学習の振り返りを行う。 ・平和集会後にアンケートを取り、平和集会を振り返る。 ・感想や各々が思う平和等を意見交流する。	ア② （知・技） イ② （思判表） ウ② （主体的）

実践報告

【成果】

・語り部さんのお話から戦争の恐ろしさや戦争後の様々な影響について、理解することができた。

・環境問題や災害など、戦争以外の平和形成への諸課題について気づいたことや意識の変化を平和集会で伝えることができた。

・戦争だけでなくコロナやいじめなど、今の生活や友だちとの関係の中にも平和をじゃまするものがあることに気づき、自身の生活や友だちとの関係をよくしようとしていた。

【課題】

・感染防止以前は、毎年平和集会を行っているが、戦争や平和を真剣に考えられる児童は少ないように感じた。被害者への共感や平和形成に参画する態度を持続することはできるのか。

・語り部さんの継承問題など、これからの平和学習に生かせるものであるか。

【考察】

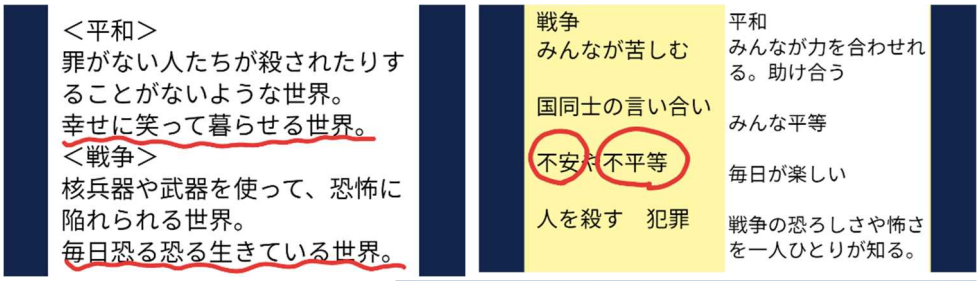
２人の語り部さんの話を真剣に聞いていた。私たちは知らない原爆の様子や空襲について、ご自身が体験された話は、児童の心に強く印象づけられたようだ。特に、戦後になっても２人の人生に戦争が大きく影響を与えた話は、衝撃が大きかった。ただ、この段階では、衝撃も大きい分、戦争が自分たちにとって、遠い過去の話と捉えている児童もいた。児童の感想をみると、戦争の恐ろしさを感じながらも、今、幸せで良かった、今の生活に感謝したいという感想があり、自分たちが平和の担い手になるという意識をもっている児童は少ないように感じた。

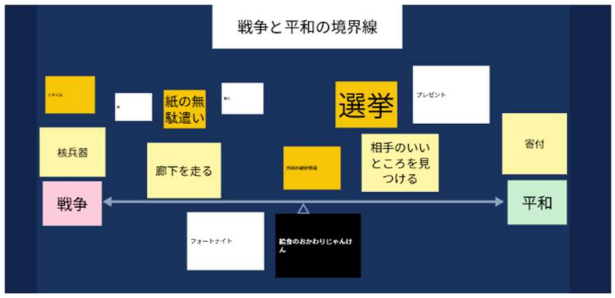
資料１　語り部さんの話を聞いた後の児童の感想（一部）

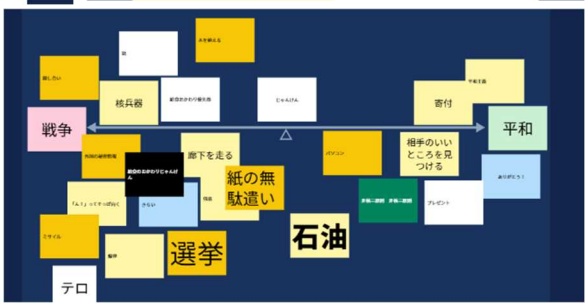
私は、秋山さんの話をきいて、戦争って何であったんだろうとあらためて思いました。今までも、戦争はいらないものだと思っていたけど、話を聞いて、たくさんの人の命がいっしゅんでなくなったのを、想像すると、体がぞくぞくしました。戦争はただ、人が死んで、人が苦しんで、人が悲しむだけのものだなと思うとかなしくなりました。

原子ばくだんでたくさんの人がなくなっているのは、悲しいと思いました。だから、家族で幸せにくらすことをありがたく思って生きたいと思います。

資料２
「戦争と平和の境界線」
ロイロノートより







児童が平和の担い手を意識し始めたのは、第３次の活動後だった。成果にあるように、自身の生活や友だちとの関係をよくしようした主たる要因は、戦争や平和という大きなテーマを児童の身近なことに意識をつないだことだと考察する。ロイロノートのシンキングツールを活用した「戦争と平和の境界線」を考える活動は、戦争以外にも様々な諸課題があることを児童に気づかせた。またその諸課題が、各児童によって違うことも意見を交流することで理解した。第３次以降では、資料１の感想文のように、戦争や平和が遠いテーマに感じる感想は出てこず、校内の平和集会で意欲的に発表していた。また、近畿ＥＳＤコンソーシアム子どもフォーラムの発表にも多くの児童が参加を希望した。参加した２人の児童を例として紹介する。Ｉさんと Ｎさんは、授業で発表する場面がほぼなく「うざい。」「めんどくさい。」などやる気のない発言をすることがしばしばあった。友だち関係に悩み、トラブルになることもあった。その２人が、意欲的に参加した背景には、平和の大切さを自分ゴトとして捉えることができたからだと考える。平和をじゃまするものは、戦争だけではなく、身近なことにもあると気づいたことや、友だちとの関係など自身の体験と結びついたことが、自分ゴトへつながったのではないだろうか。本実践は、被爆体験者の話が不可欠であるが、テーマが大きく、それだけで生活と結びつけるのは難しい。「戦争と平和の境界線」を考えたことによって、自身の生活や体験と結びつけやすくなり、友だちとの関係に悩んでいた自分と２人の語り部さんを重ね合わせ、共感していた。そのため、自分ゴトとして考えることができたのだろう。このように、学びと児童の生活をつなぐことは、自分ゴトへの重要な要素であり、これからの平和学習に限らず、授業者として大事にしていきたい。

この平和学習は「語り部さんのお話」「児童の身近に意識をつなぐ活動」の両輪で成り立っている。継承問題など、語り部さんのお話を聞くことができなかったら、この学習は成り立たない。題材を戦争に限らず平和教育を行う学習は、いくつもあるし、太平洋戦争ではなく、世界で起こっている紛争を取り上げる手法もある。平和学習といってもその内容は様々であるが、実際に体験された方と出会う活動は、児童の感性に直接届く。人が人を傷つける、殺してしまう内容のゲームに没頭している児童にとっては、特に出会わせたい。児童の生活や体験とつなごうとする授業者の意識があっても、その前提のものがなければつなぐことができない。戦争ゲームがよりリアリティあふれるものになり、小さい子供たちも手に触れることができる現代において、過去の負の歴史を風化させないように努めることは、平和について考えることができる次の世代を育てることであり、この大きな戦争の流れを止めることにつながるはずだ。